

ほぼ正常域内にあった。本法と MFT₄ 法による FT₄ 値の関係は相関係数 $r=0.968$ ($n=396$) と良好な正相関を認めたが、本法は正常域で若干高値に、4 ng/dl 以上で低くなる傾向がみられた。以上より本法による FT₄ 値は甲状腺機能をよく反映しており臨床上有用である。

29. IRMA による血中活性型レニン濃度測定法に関する検討

尾森 春艶	杉本 佳則	木谷 仁昭
末廣美津子	村上 稔	河川 正裕
樽岡 陽子	大谷 明宏	仲谷 聡子
前田真紀子	福地 稔	(兵庫医大・核)

モノクローナル抗体を用いた IRMA による血漿活性型レニン (Active renin) 濃度測定法につき検討するとともに、Renin inhibitor を用いて、同時測定が可能な血漿総レニン (Total renin) 濃度および血漿不活性化型レニン (Prorenin) 濃度測定についても併せて検討を行いその成績を報告した。

本測定法における反応温度は 20~30°C で標準曲線、測定値ともに安定し、最小検出感度は 1.6 $\mu\text{U/ml}$ と優れていた。血漿 Active renin は採血後、血漿分離まで 4 時間の保存では温度による影響はなく、血漿分離後の保存条件は -20°C および 4°C で 20 日間まで安定した成績が得られた。

血漿 Active renin 濃度の基準値は 13.8~51.1 $\mu\text{U/ml}$ 、本態性高血圧症では 4.4~71.5 $\mu\text{U/ml}$ 、腎血管性高血圧症では全例 53.1 $\mu\text{U/ml}$ 以上、また、原発性アルドステロン症は 4.5 $\mu\text{U/ml}$ であった。血漿 Total renin 濃度の基準値は 93.3~446.7 $\mu\text{U/ml}$ 、本態性高血圧症では 39.0~933.3 $\mu\text{U/ml}$ 、腎血管性高血圧症では全例高値を、また、原発性アルドステロン症は基準値の範囲であった。血漿 Prorenin 濃度の基準値は 72.4~416.9 $\mu\text{U/ml}$ 、本態性高血圧症では 34.6~898.5 $\mu\text{U/ml}$ 、腎血管性高血圧症では基準値から高値を、また、原発性アルドステロン症では基準値の範囲であった。健常人 11 名での立位負荷試験では血漿 Active renin 濃度、血漿 Total renin 濃度および血漿 Prorenin 濃度はともに負荷後で有意に高値を示した。

本測定法と Renin IRMA Pasteur Kit との測定値の比較では相関係数 $r=0.957$ と良好な相関が得られた。

30. 耳下腺ワルチン腫瘍における ^{99m}TcO₄⁻ シンチグラフィの再評価

池田 耕士	河 相吉	加藤 勤
山野 玲子	中西 佳子	田中 敬正
(関西医大・放)		
白石 友邦	(関西医大香里病院・放)	
泉 春暁	(同・中検)	
岩井 大	山下 敏夫	(関西医大・耳鼻)

【目的】 耳下腺ワルチン腫瘍における ^{99m}TcO₄⁻ シンチグラフィと病理組織学的所見を対比検討した。

【対象および方法】 手術により診断が確定した耳下腺ワルチン腫瘍 13 例 (男性 12 例, 女性 1 例, 平均年齢 58.8 歳) を対象とした。^{99m}TcO₄⁻ 185 MBq を静注し、正側面 3 方向を 400 k カウントにて撮影した。

【結果】 13 例中 12 例で陽性像を示した。また腫瘍全体が欠損像を示した 1 例と一側多発例で一側欠損像を示した 1 例があった。ワルチン腫瘍は組織学的には腫瘍間質のリンパ濾胞と上皮細胞に取り囲まれた腺腔により構成されるが、両者の構成比が異なっても取り込みには差がなかった。上皮細胞に取り囲まれた嚢胞部分は陽性像を示す部分よりやや取り込みが低いが、明らかな欠損像を示さなかった。欠損病変がみられた 2 例は中央に壊死組織がみられ、周囲の細胞には変性が強く線維化がみられた。

【まとめ】 耳下腺ワルチン腫瘍の診断には ^{99m}TcO₄⁻ シンチグラフィが非常に有用である。欠損部を示す症例が 2 例あったが、今までの報告で述べられていた大きな腺腔部分ではなく、壊死組織に一致して欠損像がみられた。

31. 出血シンチグラフィが診断に有用であった、胃粘膜シンチグラフィ陰性メッケル憩室の 1 症例

福井 弘幸	西村 恒彦	植原 敏男
小塚 隆弘	(大阪大・中放)	
尾崎 由和	原田 徳藏	(同・小児)
福澤 正洋	鎌田 振吉	岡田 正
(同・小児外)		

メッケル憩室の診断には胃粘膜シンチグラフィすなわちメッケルシンチグラフィが有用である。しかし、今回われわれは、メッケルシンチグラフィでは描出できず、その診断に出血シンチグラフィが有用であったメッケル

憩室の1症例を経験した。症例は8歳の男児で主訴は下血。2歳より数回の黒色便あり。7歳時本院受診し、注腸・小腸透視、メッケルシンチ検査を受けたが異常は認められなかった。平成5年1月30日より下血を認め、精査加療目的にて本院入院となった。入院時現症は、血圧88/44 mmHg, 脈拍102/分。血液検査は、RBC 332×10⁴/mm³, Hb 7.2 g/dl, Ht 23.1%と中等度貧血が認められた。入院後出血部位検索のため出血シンチグラフィを施行した。^{99m}Tc-Human Serum Albumin-DTPA 550 MBq (約15 mCi) 投与後の経時的撮像にて、3時間後までは異常像は認められなかった。約4時間後像で、下腹部から右側腹部にかけて異常なRIの溜りが認められ、5-6時間後ではそれが上行および下行結腸内と考えられる部位に移動し、回腸末端に近い部位よりの出血と診断された。再施行されたメッケルシンチグラフィ(^{99m}Tc-TcO₄⁻, 111 MBq)では、メッケル憩室を疑う異所性異粘膜炎は認められなかった。開腹術が施行され、回盲弁より65 cmの回腸腸間膜の反対側に母指頭大のメッケル憩室があり、憩室切除術が施行された。憩室内腔には約5 mm大の潰瘍が認められ出血源と考えられた。本症例の場合異所性胃粘膜炎は存在したが、その領域が小さい時は胃粘膜シンチグラフィが陰性となることが知られており、下血を繰り返す出血例には出血シンチグラフィがその診断に有用である場合もあると考えられた。

32. 骨転移部への¹²³I集積が原発巣の診断に有用であった甲状腺癌の1例

中野 俊一 長谷川義尚 井深啓次郎
橋詰 輝巳 野口 敦司

(大阪府立成人病セ・RI)

野口真三郎 (同・外)

転移で検出された原発不明癌の原発巣を検索する場合に、もし放射性ヨードが転移巣に取り込まれれば原発は甲状腺癌であると診断することができるが、甲状腺癌の手術前で、正常の甲状腺組織が存在する場合に、転移部位に検査量の放射ヨードが集積することは少ないと考えられている。最近、骨転移で検出され、¹²³Iシンチグラフィにより、原発巣が甲状腺癌であることを診断できた症例を経験したので報告する。患者は63歳の男性、主訴は右背部腫瘍。平成4年12月、気管支喘息の治療を受けていた病院で検査した胸部X線で、右中肺野に円形

の異常陰影を指摘され精査をすすめられて受診した。胸部断層撮影およびCTで、右第7肋骨の溶骨を伴う腫瘍影をみとめたが、全身骨シンチグラフィではこの部以外には異常集積をみとめなかった。腫瘍の穿刺細胞診で甲状腺癌の転移が疑われ、甲状腺超音波検査およびCTでは右葉に石灰像を伴う1.5 cm大の腫瘍性病変をみとめた。甲状腺の穿刺細胞診は4回行われたがいずれも陰性であった。¹²³Iによる甲状腺シンチグラフィで甲状腺右葉下部に欠損が検出され、さらに右背部の腫瘍にも軽度ではあるが、明らかな集積がみとめられ、この所見により原発巣が甲状腺であることが確認された。甲状腺の全摘術および右第7, 8肋骨摘出術が行われた。右葉下極部に1.5 cmの腫瘍がみとめられ、組織診断は濾胞癌であった。われわれはこの症例のほかにも甲状腺癌の症例で手術前に、放射性ヨードが遠隔転移巣に取り込まれた2例(肺転移1例, 骨転移1例)を経験しており、甲状腺全摘術前においても遠隔転移巣に検査量の放射性ヨードが集積する例は稀ではないものとする。

33. 骨シンチにおける肝描出

—Saccharated ferric oxide, Super-paramagnetic iron oxideによる影響—

河辺 譲治	金子 良美	西尾 博
下西 祥裕	池田 穂積	小野山靖人
		(大阪市大・放)
岡村 光英	越智 宏暢	(同・核)
小橋 肇子		(淀川キリスト教病院・放)
塩見 進		(大阪市大・三内)
田中 茂子		(多根病院・放)

【目的】骨シンチ製剤静注後、鉄コロイド製剤である、増血剤 Saccharated ferric oxide (以下フェジン)、治験中の肝臓用 MR 造影剤 Super-paramagnetic iron oxide (以下フェライト)を静注するまでの時間間隔を変えることで骨シンチにおける肝描出に与える影響を検討した。

【方法】10週齢マウス36匹を用いフェジン(鉄含量0.6 mg)、フェライト(鉄含量0.348 mg)それぞれ0.1 mlを^{99m}Tc-HMDP 0.37 MBq (0.1 ml)と混注した群、RI投与直後に投与した群、RI投与30分後に投与した群、コントロール(RIのみ投与)の4群を製し、1時間後撮像し、屠殺して血液、肝臓、脾臓、大腿骨、大腿筋群の一部をとりだしてウエル型シンチレーションカウ